

# 農村地域の魅力とその伝え方に関する研究 —長野県開田高原を対象として—

5222D014-5 小林央国\*

近年、地方への関心の高まりとともに、地域が主体的に戦略を描き実行する自律的で持続的な地方創生についての議論が展開されている。本研究では、長野県開田高原を対象に、地域住民と保健休養地オーナーを対象とした開田高原の景観評価についてアンケート調査から主体ごとの開田高原への地域認識の共通点と差異を把握し、開田高原の景観・風景の魅力および課題を明らかにした。また、開田高原に関連するメディアの分析から、どのような情報発信が行われているかを把握し、メディアに記載されている地域資源の活用事例を6つの地域資源の類型と協力者の属性に基づいての時系列で整理することで、開田高原の魅力がどのような地域資源をどのように活用して伝えられているかを明らかにした。

*Key Words* : 地方創生, 地域認識, 農村地域の魅力, 地域資源, 開田高原

## 1. 序論

### (1) 研究の背景

2020年1月より拡大した新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）による、マイクロツーリズムの推進やテレワークの普及等の働き方改革の加速を契機として、地方への関心が高まりつつある<sup>1)</sup>。こうした地方への関心を、各地域が主体的に戦略を描き実行する自律的で持続的な地方創生につなげていくことが求められている<sup>2)3)</sup>。

このような課題に対する研究として、地域住民の地域認識が地域資源の活用方法に与える影響を明らかにした研究<sup>4)5)</sup>などが見られる。しかし、地方ではまちづくりの担い手が不足しており、今後より多様な人材が参画する必要がある。地域住民だけでなく、地域と広く関わる人々の視点からも地域認識を深め、地域資源の有効活用を図る必要がある。また、住民および外部人材による主体的な地域資源の活用の実態を明らかにした研究<sup>6)7)</sup>なども見られ、まちづくりの主体間において、地域資源活用の目標像を明確にすることや、住民と外部人材の相互支援関係の重要性が示唆されている。

### (2) 研究の目的

以上の背景より、本研究では、景観法制定以前から住民による主体的な景観施策が講じられ、自然景観を活かした観光事業やIターン者の獲得で栄えてきたが、近年の人口減少・少子高齢化によりまちづ

くりの担い手が不足している長野県木曾町開田高原（以下、開田高原）を対象として研究を進める、はじめに開田高原全域と開田高原保健休養地の特性をそれぞれ整理したうえで、第一に、地域住民と保健休養地オーナーの視点から開田高原への地域認識を捉え、開田高原の魅力を明らかにすること、第二に、開田高原の魅力がどのような地域資源をどのように活用して伝えられているかを明らかにすることを目的とする。

### (3) 研究の方法

本研究では以下の方法で研究を進める。2章では、開田高原に関連する文献調査および開田高原保健休養地の現地調査により、開田高原の地理的・景観的・社会的特性を把握と開田高原保健休養地の特性を把握する。3章では、地域住民と保健休養地オーナーに対するアンケート調査より、開田高原への地域認識を把握し、開田高原の魅力を明らかにする。4章では、開田高原に関連するメディアのテキストデータの分析により、どのような情報発信が行われているかを把握し、開田高原の魅力がどのような地域資源をどのように活用して伝えられているかを明らかにする。また、実際に開田高原で開催されたイベントに参加し、運営者へのヒアリング調査をもとに、イベント事業の企画・運営の実態を把握する。5章では、以上の分析を踏まえて、本研究の成果と結論をまとめる。

\*早稲田大学大学院 創造理工学研究所 建設工学専攻 景観・デザイン 佐々木葉研究室 修士2年

## 2. 研究対象地の概要

### (1) 開田高原の地理的特性

開田高原は長野県木曾町の北西部に位置し、総面積は145.5km<sup>2</sup>、総人口は1439人(2020)の農村地域である<sup>8)</sup>。標高1,100m余りの盆地状の高原地帯であり、土地利用は山林57%、原野23%、田畑4%、宅地1%(2005)で、自然的景観がほとんどを占めている<sup>9)</sup>。昭和初期まで木曾馬の生産地として知られていたが、現在は牛の飼育を中心とした畜産業、高原野菜や蕎麦を主要生産物とした農業、御嶽山の展望地あるいは避暑地としての観光業を主要産業としている。県外からの日帰り客の割合が大きく、2014年の御嶽山の噴火とコロナ以来観光客は減少している。年間の平均気温は8.7℃(2023)ときわめて低く、冬の最低気温が-20℃を下回ることもある厳しい寒冷な気象条件を有している<sup>10)</sup>。

### (2) 開田高原の景観的特性

開田高原の景観は、谷底平野と山の形状の組み合わせによって限定された、普遍性のあるふるさとのイメージを導く、親密性のある空間が特徴である。

開田高原は、周囲を1400m~2000m及び3000mの山岳に鎖されたかなりの山岳地でありながら、末川、西野川流域ともに谷底平野が200m~500mほどの幅で広く発達し、山地がそれと並行しているため、空間構成は河川に沿って細長くのびた形をしており、高さ5~10m内外の河岸段丘が発達して平地の構成に微妙な変化を与えている。加えて、平地を貫く河川が空間を方向付けており、地形的にも見通しが良く効くため、かなりゆとりを持った空間を呈している。

開田高原の山岳は、稜線の海拔は1300~1500m前後で、平地との標高差が200~300m前後と小さく、傾斜角は20~40度余りで、中腹部がやや急峻になっているが、山麓に向かうにしたがって順次緩やかとなり、平地に接続している。また、山の斜面を刻む谷筋も開析が進み、多くは扇状地状となって平地に達している。このような面からも空間的なゆとりを導いており、山岳は空間を限定し、主に背景として景観を整える効果をもっている。開田高原の山岳うち、御嶽山だけは標高差も距離も異なる独立峰であるため、空間の限定効果も場所によってはあまり強くなり、開田高原のシンボルとして景観を整えている。

また、開田高原の景観は、土地利用構成も特徴である。開田高原の土地利用構成の基本は、谷底平野部が村落、水田、畑によって大部分を占め、樹林地が

極めて少なく開放的である。低地には河川があり、川沿いに幾分樹林が残されている。丘陵部はおおいたカラマツやアカマツの植林、あるいはミズナラやシラカバなどの二次林で、部分的に採草場がみられる。山裾の傾斜地から場所によっては中腹にかけて採草場が広く分布している。このように地形によってある程度正直な土地利用が、開田高原の景観を特徴づけている。

このように、開田高原の景観は、地形と土地利用に基本的特性があり、これを基調に切妻大屋根構造の古民家や農地、採草場などのさまざまな景観構成要素が有機的に結びつくことで開田高原特有の農村景観として成立している<sup>11)</sup>。

### (3) 開田高原の社会的特性

開田高原特有の空間的・世帯的な枠組みの基本構成が住民の地域行政への積極的な協力や責任感を導いている。地域内は15の行政区に分けられており、行政および地域住民との行政に関わる情報・議論は行政区を単位として、毎月1回の行政と住民の自治的な区会の長の合同会議である区長会で集約され、区長から五人組長で構成される区会を通して五人組長に伝達され、五人組長から各戸に伝達される仕組みとなっている。五人組は地域行政に関わる課題の議論や冠婚葬祭等の身近な地域行事の運営・補助など、主に集落内の自治・行政的な役割を担っている。

地域の共同作業については、地域住民の自然発生的な形態が一部維持されている。かつては、農作業、麻布の機織り作業などの日常生活内の様々な箇所で行われる近隣の相互扶助作業が行われていた。結いに類する共同作業は現在もその一部が存続している。また、行政区単位の共同行事として、神社の例大祭やどんど焼き等がわずかに存続している<sup>9)</sup>。

### (4) 開田高原保健休養地の特性

開田高原保健休養地は、1970年に(株)長野県地域開発公社によって分譲が開始され、総区画数は1061区画(2023)である。開田高原西野の西部に位置し、谷底平野の農村集落から約5kmの車で10分程度の距離があり、標高も約200m高い。

現在は(株)開田高原保健休養地管理センターに管理が任されており、2023年7月現在の常勤職員は7名である。昭和45年からの組織で、当時は旧開田村役場にも担当者がいた。運営にあたっての町からの補助金は、毎年7月から10月にかけて行う町道沿いの草刈り実施のための作業代のみで、それ以外はオーナーからの共益管理委託費と任意委託作業費によって運営している。

山荘の建築数については、全体の約44%の468軒であり、半数を下回る。前述の敷地内巡回にもとづく山荘の利用状況については、7月から8月にかけての夏季休暇の期間が最も多く、次いでゴールデンウィークを含む5月が多い。一方で、12月から4月の冬季についてはあまり利用されていない。

契約状況について、管理契約区画数は全体の約88%の935区画（2022年）であり、年々減少傾向にある。また、区画の売買成立状況については、土地のみの売却希望件数は減少傾向にあるが、建物＋土地の売却希望件数はやや増加傾向にある。一方で売買成立件数については、土地のみと建物＋土地の両方ともやや増加傾向にある。

保健休養地のオーナーの居住地域については、2022年時点で、愛知県が全体の約半数の464名と最も多く、次いで大阪府が187名、兵庫県が85名、京都府が47名、岐阜県が45名と、保健休養地に比較的近い地域に居住しているオーナーが多い。一方で、保健休養地から比較的遠い関東圏のオーナーは全体の約10%の89名である。

### 3. 住民と保養地オーナーの地域認識の把握

#### (1) アンケート調査の概要

開田高原への地域認識を統計的に把握するため、開田高原地域住民と開田高原保健休養地オーナーを対象としたアンケート調査を実施した。両者および回答者ごとの地域認識の共通点および差異を把握するため、回答者の個人属性および開田高原の景観の魅力と課題を共通の質問項目として設定した。調査

期間、実施方法、質問項目などの概要について表-1に示す。回答者の個人属性の集計結果を表-2に示す。両アンケートにおける年齢分布・性別の割合・居住年数の分布は同程度であるため、地域住民と保健休養地オーナーの地域認識の比較分析において、年齢・性別・居住年数が与える影響は無視できるものとした。

表-2 アンケート回答者の個人属性

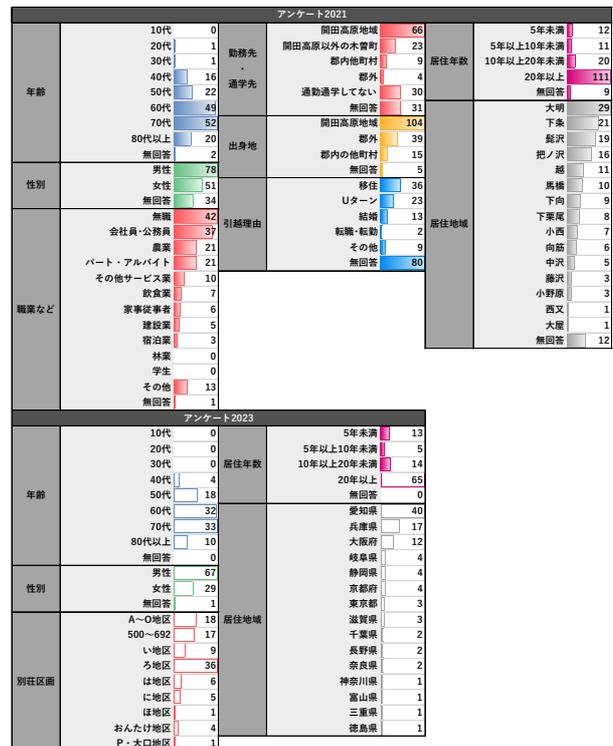


表-1 アンケート調査の概要

| 調査対象者      | 開田高原地域住民   | 開田高原保健休養地オーナー  |
|------------|--|--|
| 調査期間       | 2021年7-9月  | 2023年10-12月  |
| 配布数        | 620部   | オーナー全員(管理契約区画935区画)  |
| 配布・回収・回答方法 | 木曾町役場開田支所協力のもと郵送による配布・回収, Google Formによる回答   | 開田高原保健休養地管理センター協力のもとホームページおよび管理センターだよりにリンク掲載, Google Formによる回答   |
| 質問項目       | <p>①あなたご自身について<br/>年齢、性別、職業、勤務・通学先、出身地、引越理由、居住年数、居住地</p> <p>②開田高原のこれまでの取り組みについて<br/>取り組み全体の認知度、各取り組みの認知度</p> <p>③開田高原の景観の魅力について<br/>開田高原の景観の魅力度、開田高原の景観の美しさの要素</p> <p>④開田高原の景観の課題について<br/>開田高原の景観の嫌な要素</p> | <p>①開田高原の景観の魅力について<br/>開田高原は景観の魅力度、開田高原の景観の美しさの要素</p> <p>②開田高原の景観の課題について<br/>開田高原の景観の嫌な要素</p> <p>③開田高原保健休養地の暮らしについて<br/>別荘の区画、別荘の所有年数、別荘の利用頻度、1回の滞在日数、直近の別荘の利用状況、別荘に来る時の構成員、他オーナーとの交流、交流の場</p> <p>④開田高原の自然環境の保護育成について<br/>木曾町御嶽山麓地域開発基本条例の認知度、周囲の自然との調和の意識、意識している要素</p> <p>⑤開田高原保健休養地の満足度<br/>休養地での生活の満足度、休養地内レジャー施設の必要性、休養地内イベントの必要性</p> <p>⑥あなたご自身について<br/>年齢、性別、居住地</p> |

(2) アンケート調査結果の単純集計

a) 地域住民へのアンケート調査結果

開田高原は景観・風景が美しい・素晴らしい地域だと思えるかについては、約90%の147名がとてもそう思う、もしくはややそう思うと回答している。(図-1)

開田高原の景観・風景の美しさ・魅力に当てはまる要素については、御嶽山や遠くの山々への眺望が約82%の133名と最も多くの回答が得られていた。次いで、満天の星空や月の眺めが約66%の108名、冬の厳しい寒さの中の景色が約47%の76名、木曾馬が草を食んでいる眺めが約43%の70名、季節や時刻で変化の様子が約36%の59名、山菜やきのこ、川魚など山や川の恵みが約33%の54名、溪谷や高原の雄大な眺めが約27%の44名、豊かで澄んだ水の流れが約27%の44名と多くの回答が得られていた。(図-3)

開田高原の景観・風景の嫌な要素については、荒れた感じの森や林が約51%の83名と最も多くの回答が得られていた。次いで、手入れがされない農地や草地が約42%の69名、雑木や草が伸び放題の道が約41%の67名、外来種の増加や希少種の減少が約37%の60名、空き家や放置された倉庫が約34%の56名と多くの回答が得られていた。(図-4)

b) 保健休養地オーナーへのアンケート調査結果

開田高原は景観・風景が美しい・素晴らしい地域だと思えるかについては、約99%の96名がとてもそう思う、もしくはややそう思うと回答している。(図-2)

開田高原の景観・風景の美しさ・魅力に当てはまる要素については、御嶽山や遠くの山々への眺望が約90%の87名と最も多くの回答が得られていた。次いで、満天の星空や月の眺めが約59%の57名、季節や時刻で変化の様子が約54%の52名、冬の厳しい寒さのなかの景色が約52%の50名、溪谷や高原の雄大な眺めが約37%の36名、山菜やきのこ、川魚など山や川の恵みが約36%の35名、と多くの回答が得られていた。(図-3)

開田高原の景観・風景の嫌な要素については、全体的に回答が少なかった。空き家や放置された倉庫が約31%の30名と最も多くの回答が得られていた。次いで、目障りになる電柱や電線類が約30%の29名、荒れた感じの森や林が約24%の23名、外来種の増加や希少種の減少が約22%の21名、周囲に溶け込まない色や形の建物が約21%の20名と多くの回答が得られていた。(図-4)

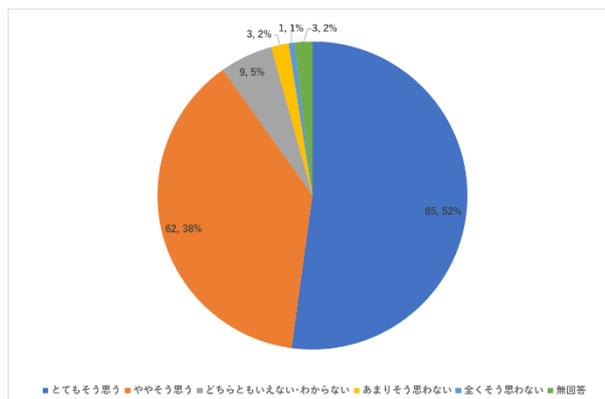


図-1 景観・風景の魅力度 (2021)

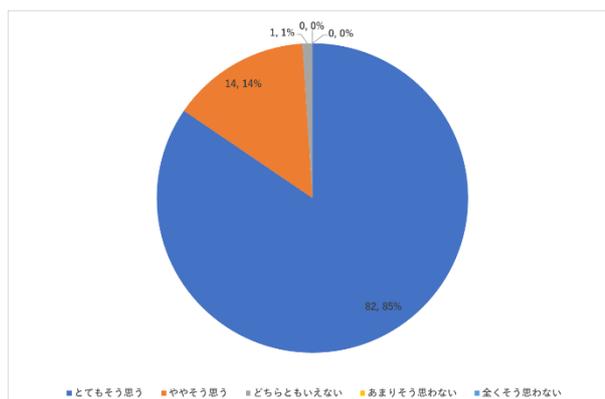


図-2 景観・風景の魅力度 (2023)

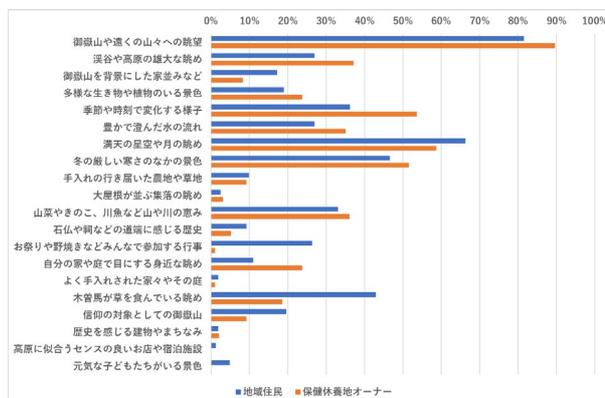


図-3 景観・風景の魅力に当てはまる要素

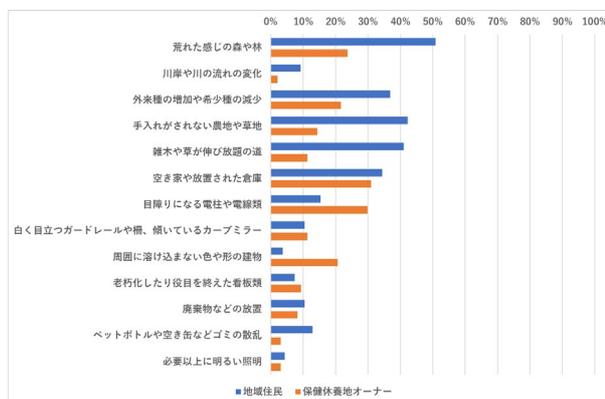


図-4 景観・風景の嫌な要素

(3) 個人属性による地域認識の共通点と差異

年齢や性別、職業、出身地、居住年数、居住地域などの個人属性の違いと地域住民か保健休養地オーナーの違いによる開田高原への地域認識の差異を統計的に評価するため、まず個人属性と開田高原の景観の魅力および課題についての回答のクロス集計を行い、その後優位水準 5%でフィッシャーの正確確率検定を実施した。なお、一連の統計解析には R および R コマンダーの機能を拡張した統計ソフトウェアである EZR<sup>12)</sup>を用いた。フィッシャーの正確確率検定結果を表-3 に示す。

景観・風景の魅力度への回答傾向について、地域住民へのアンケート調査において、出身地と引越した場合の理由に関して有意な差が見られた。また、地域住民と保健休養地オーナーに対しても有意な差が見られた。

景観・風景の魅力に当てはまる要素への回答傾向について、地域住民へのアンケート調査において、特に出身地、年齢、職業、居住地域に関して有意な差が見られた。保健休養地オーナーへのアンケート調査においては、特に居住地域に関して有意な差が見られた。また、地域住民と保健休養地オーナーの回答傾向については、季節や時刻で変化の様子、お祭りや野焼きなどみんなで参加する行事、自分の家や庭で目にする身近な眺め、木曾馬が草を食んでいる眺め、信仰の対象としての御嶽山に関して有意な差が見られた。

景観・風景の嫌な要素への回答傾向について、地域住民へのアンケート調査において、特に出身地、

居住年数に関して有意な差が見られた。保健休養地オーナーへのアンケート調査においては、個人属性に関して有意な差はあまり見られなかった。地域住民と保健休養地オーナーの回答傾向については、荒れた感じの森や林、川岸や川の流れの変化、外来種の増加や希少種の減少、手入れがされない農地や草地、雑木や草が伸び放題の道、目障りになる電柱や電線類、周囲に溶け込まない色や形の建物、ペットボトルや空き缶などのゴミの散乱に関して有意な差が見られた。

(4) 小結論

開田高原の景観・風景の魅力については、全体的に評価が高く、「日本で最も美しい村」の1つとしての地域認識が確認された。また、Uターン者やIターン者、保健休養地オーナーなど、地域外での生活経験があるとより高く評価している傾向がある。

景観・風景の魅力に当てはまる要素については、御嶽山を含む山々への眺めや谷底平野との組み合わせによる広がりある空、そして開田高原特有の寒さと冬の景色は、普遍的な魅力を有していることがわかった。また、木曾馬や野焼きなど、地域の生活に根差した文化について、その価値が地域住民によって継承されていることがわかった。一方で、四季の変化や生物多様性などについては、地域外から来た人々によってその価値が再認識されていることがわかった。

景観・風景の課題については、保健休養地オーナーに比べて、地域住民が否定的に捉えている傾向が

表-3 フィッシャーの正確確率検定結果

Table with 15 columns: 回答の割合, 年齢, 性別, 職業, 勤務先, 出身地, 引越理由, 居住年数, 居住地域, 回答の割合, 年齢, 性別, 別荘の区画, 居住年数, 居住地域, 地域住民と保健休養地オーナー. Rows include categories like '景観・風景の魅力度' and '景観・風景の嫌な要素'.

見られた。特に地域住民からは、農地や草地、道沿いの雑木や草など、人間の手が増えられる部分の管理が不十分であることへの不満が見られた。一方で、美しい景観を阻害している電柱や電線類、外灯、建物の色彩や形など、より直接的なアプローチで解決可能な要素については、地域外から来た人々によって否定的に捉えられている。

#### 4. 地域の魅力の伝え方の把握

##### (1) メディアの分析による情報発信の実態把握

###### a) 分析方法

2020年以降の開田高原観光案内所が運営する『かいだの今』と開田高原盛り上げ隊が運営する『KAIDA web magazine』、木曾町立開田小学校が運営する『学校ブログ』の3つのブログ記事のテキストデータを対象に分析を行う。

発信されている情報を抽出し、またコロナ禍における発信内容の変化・不変化を追うため、トピックモデルを用いる。トピックモデルとは、テキストデータの背後にはいくつかのトピックが存在しており、それぞれのトピックが語を出現させていると仮定するモデルである。また、トピックモデルでは各文書に含まれるトピックの比率を推定するため、各トピックと外部変数（時間）の関連も見ることができると、本研究において有効であるとした<sup>13)</sup>。

トピックモデルを用いた分析のための処理として、KH Coder を用いてテキストデータに対し形態素解析を行う。分析対象は名詞（固有名詞含む）に限定し、さらに「木曾馬/の/里」等の固有名詞を強制的に抽出するため、また「利用/者」等の過度な語の切り出しを避けるために複合語リストを作成してスコアの高い語を連結させた。また、語彙数による計算不可を軽減するため、各テキストデータの総抽出語の90%を分析対象とし、出現頻度が低い語除外した。

抽出されたトピックを、各トピックに高確率で出現する語およびそのトピックを含む文書を参照することで命名した。

###### b) トピックの抽出結果およびトピック比率の変化

抽出されたトピックを表-4, 5, 6に示す。かいだの今では、観光客への呼びかけや特産物の活用など、観光客を意識した観光地としての宣伝につながるトピックが多く抽出された。KAIDA web magazine では、ガーデニングや子供の保育など、開田高原で暮らす地域住民独自の視点による日常生活での気づきに関するトピックが多く抽出された。学校ブログでは、体験型学習や伝統・文化の継承など、教育カリキュ

ラムの内容についてのトピックや、地域の協力や支援団体など、開田小学校と地域住民のつながりに関するトピックが多く抽出された。このように、投稿者の立場やターゲット層によって抽出されるトピックに大きな違いが見られた。

外部変数である投稿年ごとのトピック比率を指標として比較した結果を表-7, 8, 9に示す。開田の今のトピック比率の変化をみると、2021年に野鳥が、2022年に代表的視点場が上昇している一方で、2021年に車の往来が、2021~2022年に観光客への呼びかけが減少している。これは、コロナ禍において観光業に関連する動きが減衰したこと、またコロナ禍においてより身近な環境に目が向けられ、高原特有の生態系や農村景観の価値が再認識されたことが推察される。KAIDA web magazine のトピック比率の変化をみると、2021年に農作業とガーデニングが上昇している。ここからも、コロナ禍においてより身近な環境や農村地域特有の営みがより魅力的に感じられるようになったことが推察される。学校ブログについては、コロナ禍におけるトピック比率の変化があまり見られなかった。

##### (2) 地域資源の活用方法の実態把握

前述の3つのブログ記事に加えて、見出しに「開田高原」を含む中日新聞の新聞記事と木曾町立開田こども園の自然保育事例に記載されている地域資源の活用事例について地域資源の類型<sup>14)</sup>、協力者の属性に基づいて時系列で整理した。(図-5) 中日新聞、かいだの今、KAIDA web magazine に記載されていた地域資源の活用事例を観光業・行政によるもの、学校ブログ、自然保育事例に記載されていた地域資源の活用事例を教育・学習支援によるものとしてそれぞれ地域資源の類型と協力者の属性とでクロス集計を行った。(表-10, 11) 農畜産業型の地域資源が観光業・行政、教育・学習支援ともに最も多く活用されており、地域住民による協力が得られている。軽トラックの荷台で地元の農産物や特産品を販売する軽トラ市や新そば祭りなど、恒例化しているイベントも見られる。自然環境型およびインフラ型の地域資源については、事業者や学識者の協力によってイベント化や地域内行政につながっているものも多く見られる。遺構型の地域資源については観光業、教育・学習支援ともに活用事例が少なく、今後より広く活用されることが期待される。施設型の地域資源については、観光業において特に活用されている。外部の事業者が運営会社の開田高原マイアスキー場は、草刈りなどで地域住民の協力を得るなど、開田高原の重要な観光資源として広く活用されている。

表-7 かいだの今のトピック比率の変化

Table with 4 columns: 2020年, 2021年, 2022年, 2023年. Rows include categories like 観光客への呼びかけ, 川の状況, 特産物の活用, etc.

表-8 KAIDA web magazine のトピック比率の変化

Table with 4 columns: 2020年, 2021年, 2022年, 2023年. Rows include categories like 学生の活動, 冬の暮らし, 地域住民の活動, etc.

表-9 学校プログラムのトピック比率の変化

Table with 4 columns: 2021年, 2022年, 2023年. Rows include categories like 地域の協力, 生徒の活動, 支援団体, etc.

表-4 かいだの今のトピック

Table with 4 columns: 観光客への呼びかけ, 川の状況, 四季の変化. Rows include categories like 観光客への呼びかけ, 川の状況, 四季の変化, etc.

表-5 KAIDA web magazine のトピック

Table with 4 columns: ガーデニング, 農作業, 子どもの保育. Rows include categories like ガーデニング, 農作業, 子どもの保育, etc.

表-6 学校プログラムのトピック

Table with 4 columns: 校長先生との対話, 支援団体, 体験型学習, 学習の場. Rows include categories like 校長先生との対話, 支援団体, 体験型学習, etc.

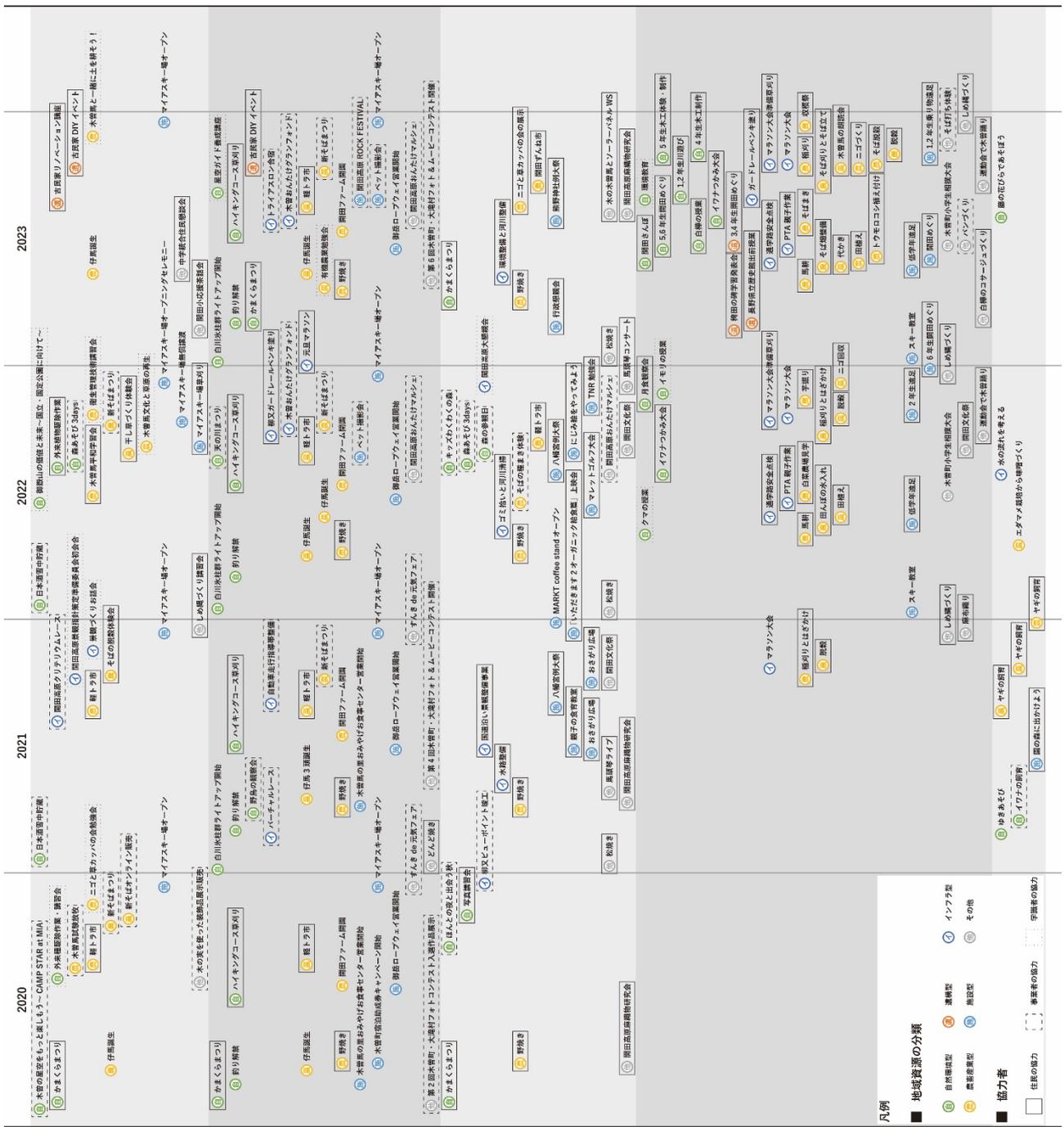


図-5 地域資源の活用事例 (2020-2023)

中日新聞

開田高原観光案内所 かいだの今

開田高原盛り上げ隊 KAIDA web magazine

木霊町立開田小学校 学校ブログ

木霊町立開田こども園 自然保育事例

表-10 観光業・行政における地域資源の活用事例の数

|     | 自然環境型 | 遺構型 | インフラ型 | 農畜産業型 | 施設方 | その他 |
|-----|-------|-----|-------|-------|-----|-----|
| 住民  | 11    | 3   | 6     | 20    | 12  | 15  |
| 事業者 | 10    | 0   | 7     | 9     | 3   | 9   |
| 学識者 | 3     | 0   | 3     | 4     | 0   | 0   |

表-11 教育・学習支援における地域資源の活用事例の数

|     | 自然環境型 | 遺構型 | インフラ型 | 農畜産業型 | 施設方 | その他 |
|-----|-------|-----|-------|-------|-----|-----|
| 住民  | 9     | 3   | 7     | 26    | 7   | 8   |
| 事業者 | 1     | 0   | 0     | 0     | 0   | 2   |
| 学識者 | 3     | 0   | 0     | 0     | 0   | 0   |

### (3) イベント事業の企画・運営の実態把握

#### a) ヒアリング調査の概要

開田高原の地域資源の活用したイベント事業の企画の意図と運営方法を把握するため、「長野県共創人口構築事業 DIY イベント in 木曾町開田高原」の運営者である木曾町地域おこし協力隊の八山氏と寺内氏を対象としたヒアリング調査をイベント会場現地にて実施した。イベント発足の経緯、イベントの運営について、今後の事業発展予定、イベントの感想の4つの質問項目を設定した。

#### b) ヒアリング調査結果

##### ①イベント発足の経緯

2022年度に始まった長野県共創人口構築事業では、2022年10月に2023年度の担当者を募集。立候補は長和町と木曾町のみで、木曾町では元々DIYイベントを計画していたが、単独での運営が難しく、県事業として実施することになった。古民家を活用したいという意欲的な人物を探し、山下しんやの所有者である寺内氏にオファーがあった。広報には〇と編集社とRural Laboが協力し、環境土木の専門家や地元の専門家が講師として招待された。

##### ②イベントの運営について

長野県企画振興部がDIYを通じたつながり人口創出事業を〇と編集社に委託し、担当者に八山氏と寺内氏が選出された。寺内氏の提案でイベントでは池づくりが初期段階で計画され、日程は週末の金土日 を2週続けて開催することが決定した。広告は木曾町内向けと外部向けの2種類のチラシが作成され、主に回覧で配布された。イベント関連の経費は長野県の補助金で賄われ、材料費は寺内氏が負担した。

##### ③今後の事業発展予定

イベント会場となった山下しんやは、将来的には地域交流拠点としてだけでなく、ゲストハウスになる構想があり、未完成な状態から営業を開始し、宿泊客と共に完成させるコンセプトが検討されている。この取り組みにより新しい体験と共に地域への愛着が生まれることが期待される。また、木曾町では古民家の取り壊しを防ぐ手段がなく、多くの古民家が

失われる懸念がある。そこで、DIYイベントを通じて、古民家の改修が地域外からの興味を引き、自らの家を活用したいという意欲が生まれることが期待される。将来的には宿泊や賃貸など様々な形態で古民家を維持管理する選択肢が検討されている。他にも、モバイルハウスイベントや地域の歴史を感じる建物巡りなどで住み方や地域への評価向上を図るイベントも予定されている。

#### ④イベントの感想

今回のイベントで200人以上の参加者が集まり、閑散期でも多くの人を訪れることを地域住民に示せたことを成果に感じている。今後、古民家の改修を進めるとともに昭和住宅の活用も検討されている。また、異なる住み方のニーズに応えるため、幅広い選択肢を提供するイベントが企画されている。一方で、参加者の増加に伴い課題が浮き彫りになり、イベント事業のチームの強化が検討されている。また、木曾町全体を巻き込んだイベントの企画や、地元住民との繋がりを生かした古民家の活用が期待される。

## 5. 結論

### (1) 本研究の成果

本研究では以下の成果を得た。

- 地域住民と保健休養地オーナーを対象としたアンケート調査から、開田高原は景観・風景が美しい地域であり、御嶽山を含む山々への眺めや谷底平野との組み合わせによる広がりある空、そして開田高原特有の寒さと冬の景色はが普遍的な魅力として寄与しているという地域認識の共通点を明らかにした。また、地域外から来た人々はより景観阻害要因の除却など直接的なアプローチで解決できることを課題に感じている一方で、地元住民は人間の手が加えられる部分の管理が不十分であることに課題を感じているという地域認識の差異も明らかにした。
- トピックモデルを用いた開田高原に関連するブログ記事の分析から、開田高原のどのような魅力発信されているかを明らかにした。また、観光地としての宣伝につながる情報や、地域住民独自の視点による日常生活での気づきに関する情報など、投稿者の立場やターゲット層によって発信されている情報の内容が異なることを明らかにした。
- 開田高原に関連するブログ記事および新聞記事に記載されている地域資源の活用事例について、6つの地域資源の類型と協力者の属性に基づいて時系列で整理し、どのような地域資源がどの

ように活用されているかを明らかにした。また、地域資源の類型ごとの活用頻度や協力者の属性の違いについて明らかにした。

- ・ イベント事業の企画・運営の実態については、木曾町あるいは個人事業者単独での大規模なイベントは運営資金の調達に課題があることを明らかにした。また、個人の地域振興活動は地域住民にあまり認知されていないことを明らかにした。「長野県共創人口構築事業 DIY イベント in 木曾町開田高原」では地域内外から多くの参加者が集まり、地域住民と地域振興団体、地域外の人々とのつながりの形成が確認された。

## (2) 今後の展望

本研究では、景観評価を主軸にして主体ごとおよび地域住民と保健休養地オーナー間の地域認識の共通点と差異を明らかにした。そのため、観光客も対象とした調査や景観以外の評価軸による調査によって開田高原への地域認識をより一層深めることができると考える。また、本研究で得られた地域認識の共通点や差異、地域資源の活用方法の実態をまちづくりの担い手間で共有することで、まちづくりの方向性や地域資源の活用方法の目標像が明確になると考える。

## <補注>

[1] 前田ら<sup>14)</sup>の研究で用いられている地域資源の類型の定義を参照し、自然環境型、遺構型、インフラ型、農畜産業型、施設型、その他に分類している。(表-12)

表-12 地域資源の類型の定義

|         |       |                                       |
|---------|-------|---------------------------------------|
| 地域資源の類型 | 自然環境型 | 山や河川、植物の自生地等の自然環境に分類されるもの             |
|         | 遺構型   | 史跡や歴史博物館等の人間の活動の痕跡が見られるもの             |
|         | インフラ型 | 道路や橋、展望台等の社会基盤に分類されるもの                |
|         | 農畜産業型 | 田畑での生産や家畜の飼育等の農畜産業に分類されるもの            |
|         | 施設型   | 集落の神社や、温泉、スキー場等の人の手により建立され、今も使われているもの |
|         | その他   | 食文化、工芸技術、踊り等の無形の文化的・伝統的所産             |

## <参考文献>

- 1) 内閣官房：移住者の増加に向けた広報戦略の立案・実施のための調査事業報告書，2020
- 2) 小林潔司：地域振興とオーセンティシティー天草南蛮文化を例にして，平成30年度土木学会 小林潔司会長情報発信プロジェクト，2019
- 3) 小林潔司：ボランティア組織と地域振興，平成30年度土木学会 小林潔司会長情報発信プロジェクト，2019

- 4) 折田仁典：過疎問題と過疎地域の地域イメージに関する基礎的研究，土木計画学研究論文集 No.7, 203-210, 1989
- 5) 白柳洋俊・須藤雅陽・羽鳥剛史：地域の歴史に関する知識が町並み保全意識に与える影響分析—歴史まちづくりを巡る町並み保全活動への参画意識と町並み保全のステレオタイプに着目して—，日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.56 No.3, 429-436, 2021
- 6) 室田昌子・原科幸彦：住民の土地利用目標像の策定過程と共有状態に関する基礎的研究—掛川市生涯学習まちづくり土地条例に基づく事例を対象として—，第32回日本都市計画学会学術研究論文集, 241-246, 1997
- 7) 藤井真麻・後藤春彦・野田満・森田棕也・山崎義人：過疎山間地域における外部人材の受け入れ体制に関する研究—「緑のふるさと協力隊」を21年間継続する上野村での相互支援に着目して—，日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.51 No.3, 1168-1173, 2016
- 8) 国勢調査 / 令和2年国勢調査 / 小地域集計 (主な内容：基本単位区別，町丁・字別人口など) 20：長野県 / 男女，年齢(5歳階級) 別人口，平均年齢及び総年齢—町丁・字等
- 9) 藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美：基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究—長野県旧開田村の景観を巡る政策群を対象として—，土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.68, No.3, 160-179, 2012
- 10) 気象庁ホームページ  
<https://www.data.jma.go.jp/risk/obsdl/>
- 11) 財団法人観光資源保護財団：観光資源調査報告書，Vol.7，木曾開田高原，財団法人観光資源保護財団，1979
- 12) Y Kanda：Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics，Bone Marrow Transplant, 48, 452-458, 2013
- 13) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して，ナカニシヤ出版，198-204, 2020
- 14) 前田茜・後藤春彦・佐藤宏亮：屋久島の里地における地域資源への来訪者の流入と集落の対応に関する研究，日本都市計画学会 都市計画論文集 No.45-3, 817-822, 2010

## <外部発表記録>

小林央国・佐々木葉：農村集落の魅力の表現分析—長野県開田高原におけるメディアと語りから，第19回景観・デザイン研究発表会ポスター発表，2023.12.